

最高賞の三等賞」などが注目された。朝倉はほかに「猫」、「肖像」を、荻原もほかに「労働者」を出品している。

以下、文展（大正七年第十二回まで開催）については特に必要な場合にのみ記述する。

### ⑦ 吾楽会と吾楽殿

吾楽会は、明治四十二年、正木直彦東京美術学校長の首唱に岩村透、和田英作、結城素明らが賛同して結成された美術クラブである。福井江亭、合田清、岡田三郎助、古宇田実、千頭庸哉、小場恒吉、香取秀真ら現役本校教官らが多数参加している。ほかには彫刻家の米原雲海、山崎朝雲、陶芸の板谷波山、刺繍の菅原直之助、貝細工の浅井寛哉など、幅広い方面から新進の美術家や美術愛好家が集まった。最初の会員数は三十名ほどで、小場恒吉が幹事役となり毎月第三土曜日を期して集合し、互いの作品や図案を批評したり、興味深い図案があれば製作して同好者に分かつとといった会であったが、古宇田によると「追々興味が増し遂には其品物の陳列所として、また會場としての建物を供給しようと特志家（八官町の小林傳次郎氏）まで出来て、遂に吾樂的の建物が新築されること云ふ事になった」（『美術新報』第九卷第三号。明治四十三年一月）という。こうして明治四十四年四月、京橋の八官町に誕生したのが吾樂殿（古宇田実設計）である。中国風、朝鮮風に日本在来の様式を混淆し、西洋商店の特徴を加味した折衷様式の个性的な二階建て建築であった。一階は吾楽会専用の陳列室兼売店、二階は展覽會場として使用し

た。最初の展覽會は、美術新報が主催した「新進作家小品展覽會」だった。次いで吾楽会主催の「団扇絵展覽會」が開かれ好評を博した。吾楽会は、工芸作家と一般の愛好家とをつなぐ場として大いに機能するが、より本格的な工芸美術団体の発足とともにしだいに失速し、大正十二年の大震災で吾樂殿が焼失すると事実上活動停止となる。以後は吾楽同人展覽會を開くのみとなる。